

静まり返っている。

長椅子に腰を下ろしている、中島、阿部、他三、四人の刑事。

村上、看護師に伴われシャツを巻き上げ左手の静脈に巻かれた包帯を押さえて現れる。

村上、病室の佐藤を気にしている。

看護師「少しお休みにならなくては……」

村上「放つといてくれたまえ！」

佐藤、病室の前でうなだれる。

中島、村上に近づくと、

「(ポツンと)……何グラム取った？」

村上、血走った目。かすれた声。

「……知りません……」

一同、沈黙。

村上、堪えられなくなって、

「係長！……言つて下さい！ また……また僕のコルト

の弾が出たんですか？」

中島、視線をそらす。

村上、隣の阿部にすがりつく。

「安部さん！ 言つて下さい！」

阿部「……」

村上「広瀬さん！」

広瀬「……」

刑事たちは誰も答えない。

病室から看護師が飛び出して来ると、治療具を手に戻って来る。

その慌しさに村上、狂気したように喚くと、手術室の扉にすがりつく。

村上「(絞り出すような声で)佐藤さんッ！ 死なないでくれ

ッ！ お願いだ！ 佐藤さんッ！ 佐藤さんッ！ 死なな

いでくれ！ 佐藤さんお願いだ、生きていてくれッ！」

刑事たち、立ち上がると、村上を抱えるようににして

去る。

佐藤の名を呼びながら遠ざかる村上の絶叫が、長い廊下に響き渡る。

145 同 廊下（病室前）

村上がうずくまっている。

一点をボンヤリ見据えたまま、身動きもしない。

病室から出て来た看護師、村上に気づき、

「……まだ、いらしたんですかア？」

村上「……」

看護師「もう危険な状態は過ぎたんですよ」

村上「……」

何を言われても反応がない。

○・L

「刑事さん……刑事さん」

と、いう細い声。

村上、顔をあげる。

横様に差し込む朝日の中に、ハルミが立っている。

『何しに来た！』

村上の眼がそう叫んでいる。

——間——

ハルミ、キツと村上を見つめ必死に言う。

ハルミ「遊佐が……遊佐が六時に大原駅で待っています」

村上「なに？」

ハルミ「……さっき電話で」

村上、無言でパッと立ち上がる。

ハルミ「私も行きます！」

村上「やめろ！ まだ三発、弾が残っているんだ！」

と、駆け出す。

146 大原駅のホーム

電車から飛び降りる、村上。

六時を少し廻っている時計。

村上、来る。

待合室には、電車を待つ十五、六人の客がいる。

村上、ハツとする——以下、村上の独白。

村上『しまった。どれが遊佐だろう……どれが遊佐だ』

村上は、殺気だった眼を隠すように伏せると、片隅へ腰を下ろす。

村上『……慌てるな……慌てるな……落ち着け、落ち着くんのだ』

村上、煙草に火をつけるが、その手は少し震えている。

村上『落ち着いて』

村上、まわりの人を観察しはじめる。

村上『落ち着くんのだ……二十八歳……白い麻の背広……二十八歳……白い麻の背広……しかし洋服は替えたのかもしれない……すると、二十八歳ぐらいの男……二十八歳ぐらいの男……あッ、そうだ、夕べ遊佐は土砂降りどしゃぶの中を飛び出したんだ……泥だらけの靴……泥だらけの靴……泥だらけの靴……泥だらけのズボン……泥だらけのズボン……泥だらけの……』

と、目の前に外を伺う泥だらけのズボンの男が居る。

男、腰掛けると煙草をくわえ、マッチをする……左手だ。

はつとする村上、

『あッ、左手！』

カチッと合う二人の視線。

村上、咄嗟にポケットの拳銃を探る。

『あッ、ピストルは佐藤さんに……』

村上、一瞬、狼狽。

その隙を見て男待合室から飛び出す。

遊佐、逃げ込む。

村上、追って来るが、ハッと棒立ちになる。

遊佐がコルトを左手に握って凄惨な形相で立っている。

二人の距離は、三間（約5メートル40センチ）くらい。

二人、ぜいぜい息を切らしている。

その息づまるような睨み合い。

その時、二人の間を通して、文化住宅から、ピアノの練習が聞こえて来る――

その、のどかなメロディ――

遊佐、急に泣きそうな顔になると、病的に眼を剥いてコルトの引金を引く。

ターン！

村上の左腕がピクツと動く。

ピアノの音がピタリと止む。

152 文化住宅の窓

ピアノを弾いていた奥さんが変な顔をして窓の表を見る。

153 窓の外

向こうの林に、男が二人見える。

154 文化住宅の窓

奥さん、気にとめず、またピアノを弾き始める。

155 雑木林

村上と遊佐は、先刻のまま睨み合っている。

村上の左腕から血が滴っている。

村上、ズツと押し出る。

遊佐、気おされたように一歩さがる。

村上、また一歩出る……およそ、恐怖などというものは村上にはない……全身が憤怒で燃え上がっている。

る。

遊佐は、吞まれて下がる。

村上の歩調は変わらない。

油汗を滲ませ、割れるような呼吸をしている、遊佐。

遊佐、恐怖に顔を歪め引金を引く。

ターン！

弾がそれ小枝が飛び散る。

ピアノの音が又止む。

瞬間……村上が、身体ごと叩きつけるように、一歩

大股にズイと出る。

遊佐、逃げ腰になりながら、又、引金を引く。

ターン！

弾は木の幹をけずる。

村上、ニットと笑う。

遊佐、歯を剥いて、引金を引く。

カチリ！

空しい音。

狼狽して、再び引金を引く遊佐。

弾はもうない！

村上、パツと飛び掛る。

二人は一かたまりになって、ぶつかり合う。

遊佐、逃げ出す。

追う村上。

遊佐、村上にコルトを投げつける。

村上、地に落ちたコルトを手に取るとポケットに捻

り込むみ遊佐を追う。

156 逃げる遊佐、追う村上

157 逃げる遊佐、追う村上

158 逃げる遊佐、追う村上

159
↳
164

遊佐を追いつめる、村上。

遊佐に手錠を掛けるとコルトを改めて確認する。

村上、『俺のコルトが戻って来た』とう安堵感。

二人の荒々しい呼吸。

ドロドロになった遊佐、手錠だけが冷然と光っている。

その遊佐をとりまくのは——青い晴れ渡った空と白い雲——蝶々——野の花——遠くを行く子供たちの歌声！

その時、瀕死の獣……人間の声とも思えぬ遊佐のうめき声。

「おお、おお、おお」

遊佐、草いきれの中を転げ廻って吠えている。

村上、凝然となる——この怖ろしい泣き方は見たこともない。

胸から血を吹き上げるような泣き声——どうにもならぬ悔恨の姿。

村上は、その怖ろしい光景から眼を外すことができない。